

海外調査余話

樋口 義治 (愛知大学)

Interesting Facts and Stories from the Overseas Survey

Higuchi Yoshiharu

要約：樋口と地域政策学部の阿部聖教授は、中部地域企業のアジア進出について、2000年代はじめに計13回、現地を訪れ海外調査を実施した。現地においては公式報告以外にさまざまな事象や事態を経験してきた。今回、タイ（2004年現地調査）とインド（2006年現地調査）について、こうした海外調査にまつわるいわばよもやま話を『海外調査余話』として紹介する。

1. はじめに

中部企業のアジア進出に関する海外調査余話について

本稿は『海外調査余話』ということで、愛知大学において樋口と地域政策学部の阿部聖教授が2003年から2013年までの期間に行った、中部地域地元企業のアジア進出についての海外調査に関するものである。

2003年から2013年までの間、二人は共同して「日本中部地域企業のアジア進出」のテーマの下で、合計13回の海外調査を実施した。調査対象国は中国6回、インドネシア2回、ベトナム2回、タイ、インド、台湾、各1回であった。これら海外調査の公式な報告についてはすでに発表している。興味のある方は本稿末の参考文献をご覧ください。

こうした海外調査の公式報告とは別に、海外調査においては現地において思いもよらない経験や文物を見、経験することがある。これらは通常公式報告には書くことはないが、そこには興味のある事物や事態があることが多い。ここにそれらの一部を写真と共に紹介してみようと思う。また、これらの調査が行われたのは今から20年前であることに留意されたい。

日本企業の2000年代アジア進出

ここで、2000年代の、日本企業の東南アジア進出

について少し見ておこう。私たちの海外調査は、中部地方にある地元企業がどのように海外展開をしているかに関心があったのであるが、これは製造業を中心とする中部企業に限ったことではない。2000年代日本企業は製造業を中心に、円高や労働力コストの上昇などの理由により、一斉にアジア地域へ生産拠点を移し工場の現地化を進めた。中部地域の製造企業においては以下の特徴を有した。

①自動車産業の進出：トヨタやホンダなど、中部地域の自動車メーカーはアジア地域に生産拠点を進出させた。これにより、地域の成長市場へのアクセスが容易になり、生産コストの削減が図られた。

②供給チェーンの構築：中部地域の大手製造企業は、アジア地域において日本からの部品メーカーの進出のみならず、現地のサプライヤーとの連携やパートナーシップによりサプライチェーンの構築を進め、効率的な生産活動が実現した。

③ASEAN地域との連携：ASEAN経済共同体の形成が進む中、中部地域の企業はASEAN諸国との連携を強化した。共同プロジェクトや提携を通じて、地域市場への参入が進んだ。

④進出先は中国が最も多く、次いで、タイ、インドネシア、ベトナムとなった。

以上のように、中部地域の製造企業は2000年代初



写真1. タイの空港にて 阿部, 樋口



写真3. タイスキレストラン ウェイトレス



写真2. 三輪車に乗る, 運転手の後ろ姿



写真4. タイレストラン料理

頭において、アジア地域における市場の拡大と連携を重視し、グローバルなビジネス展開を推進していった。

2. 海外調査余話

(1) タイ 2004年8月19日～23日

参加者：阿部聖, 樋口義治, 佐藤元彦

(当時いずれも愛知大学経済学部教授)

訪問先：八幡ねじグループ (愛知県西春日井郡西春日町)

アイホングループ (愛知県名古屋市熱田区)

アイシン高丘グループ (愛知県豊田市)

行程：

2004年8月19日 (木) 名古屋空港→タイ ドンムアン空港→ホテル

8月20日 (金) 八幡ねじ, アイホン訪問

8月21日 (土) メコン川, ミャンマー, ラオス上陸

8月22日 (日) 戦場にかける橋 視察

8月23日 (月) アイシン高丘訪問→帰国

タイ出発, 朝早く出る, 名古屋空港から

2004年8月19日小牧の名古屋空港 (中部国際空港は開港していなかった) 10時30分のタイ行きフライトなので、朝6時起きで出発、空港で阿部氏と会う。バンコックまで6時間、タイ、バンコックのドンムアン空港 (現在はスワンナプーム国際空港が到着空港) (写真1) で先にタイにいた佐藤氏と会う。その後、ツクツクのような三輪車でホテルへ向かう (写真2)。



写真5. 八幡ねじ工場訪問 現地日本人スタッフと



写真7. 途中の食事, 嬉しそうな阿部先生



写真6. 工場内で仕事中の女性従業員

樋口ジンマシン出る

はじめから病気の話で申し訳ないが、海外で病気になると大変困る。ずいぶん後年だが、2019年の12月にやはりタイへ行った時のことだが、日本を出るときから咳が止まらなかった。タイの北でかなり田舎に行っていた。メンバーは5人でコロナ前だったが、私の咳を嫌がられてタイの診療所へ行けと言う。仕方ないので通訳と一緒に診療所へ行った。医者一人で女性看護師一人の診療所のようなであったが、注射を打たれて、咳が止まった。海外にはずいぶん行ったが、病院へ行ったのはこの時だけだ。

さて、タイの一日目、タイスキを食べるということで店に行った。女子店員がサーブしてくれた(写真3, 4)。

これがいけなかったのか、夜になって(明け方4時ごろ)ひどいジンマシンが出だした。これまでもたまにアレルギーでジンマシンが出るのだが、かな

りひどく、アナフィラキシーショックのような状態になる。この時にはひたすら静かにしているしかない。

このジンマシンのため、次の日は朝昼晩と食事せず、移動のときは車の中で死んだようになっていた。それでも工場訪問はこのような形で付き合った。夜になってようやく収まってきた。

工場訪問

工場(八幡ねじ)を訪問して現地の話を聞き、工場内を見学した(写真5, 6)。

ゴールデン・トライアングル(タイ, ミャンマー, ラオス), ドラッグフリーゾーンの意味を間違える

8月21日は土曜日なので、佐藤氏の案内で、タイ, ラオス, ミャンマーの3国が境を接する地帯へ行った(写真7, 8, 9)。

ゴールデン・トライアングル(黄金の三角地帯)はタイ, ラオス, ミャンマーの3カ国がメコン川で接する地域であり、麻薬の栽培でも悪名高かった。ミャンマーの国境は歩いて通過する。一応パスポートには入国印が押された。ラオスへはメコン川の中洲にあるラオス領の島「ドンサオ島」へ上陸する(写真8)。メコン川クルーズの途中にちょっと寄った。

ゴールデン・トライアングルは我々が行った2004



写真8. メコン川を渡る，ラオスに一瞬上陸



写真9. ドラッグフリーゾーンの意味を間違える

年の頃には、世界最大の麻薬・覚醒剤密造地帯のひとつとして知られたエリアだった。そのため、この看板（写真9）を見たときは思わず、「ウーム、ここでは麻薬を自由にしよう」という運動をしているのかと思ってしまった。実際にはこの看板は真逆の意味であった。

「Let us all participate in realizing drug free zone.」は、

「麻薬の所持・禁止区域，そして，麻薬のない地帯を実現するために皆が参加しようという意味」だった。全く「麻薬天国にしよう」と意味をとったのは、2004年頃にはゴールデン・トライアングル（黄金の三角地帯）が無駄地帯だと錯覚していたせいだった。2023年の今では、この地域は麻薬撲滅を図り、大きな工業地帯になっているということである。



図1. 行程図

(2) インド 2006年2月18日～24日

参加者：阿部聖，樋口義治

訪問先：(株) ソミック石川工場（静岡県浜松市）
 (株) デンソー工場（愛知県刈谷市）
 (株) ユタカ技研工場（静岡県浜松市）
 中央発條(株) 工場（愛知県名古屋市）

行程：

2006年2月18日（土）名古屋空港→バンコック空港（トランジット）→インドデリー空港（インディラ・ガンジー空港 約12時間）ニューデリーホテル泊

2月19日（日）自由行動（タージ・マハル見学）

2月20日（月）工場見学（ソミック石川，デンソー）

2月21日（火）デリー空港出発→プネー空港 プネーホテル泊

2月22日（水）工場見学（ユタカ技研，中央発條）

2月23日（木）プネー →タクシー ムンバイ空港（23：50出発）→バンコック→関西空港

今回のインド調査は阿部・樋口二人だけであり、通訳やガイドも使わないので大変だろうと思ってい

た。英語が通じると良いのだが（実際にはひどく分かりにくいインド英語であった）。

インド内の行程は図1のようである。

長い長い旅程、名古屋空港から出発

名古屋空港を定刻（10時半）に飛び立ってバンコック空港までは順調であった。3時間以上のトランジットであった。しかしその後が長く結局日本時間11時過ぎにインド空港に到着した。しかし、入国までの時間が異常にかかる。空港はやけに埃っぽい。ようやく外に出てルピーに換える。軽トラックみたいな迎えを発見して、乗り込み夜の街を走る。首都なののでこぼこ道である。やたらにホーンを鳴らしてうるさいこと。

一部屋ダブルベット一つしかない事件

ずいぶんとゴチャゴチャした街中に入るなと思っていると、日本では相当騒がしい街中のこ汚いホテルに泊まる。遅くて疲れているので早く部屋に入りたいので、2部屋予約したと言うと、何と「1roomしかない」という。冗談じゃない、Ajanta ホテルは愛大の生協でそれなりの金（1泊15,000円）を払って予約したので、少し不安であったが、部屋がないとは思わなかった。さらに、部屋はダブルベットが1つしかないと言う。阿部さんと二人で寝るのか。二人で顔を見合わず。インド人は平気でだまそうとすると聞いていたので、怒って交渉する。日本で2部屋予約したと予約シートを見せる。ないものはないという。ほかのホテルに変えてくれという。明日は祭でこの辺はいっぱいなんだと。代わりに朝食と祭までのタクシー代をタダにするからと言ってくる。冗談じゃない、予約金の6,000ルピー（当時の交換比率：約1ルピー2.6円で約15,000円）を返せと粘る。ようやく、しぶしぶ、もう一部屋出してきた。水もない汚い部屋だがまあ良しとした。インド人の英語の聞き取りにくいこと。寝るが、がやがやとうるさい。先が思いやられる。

タージ・マハル見学

2月19日、日曜日で自由行動の朝、起きて阿部さんと相談して世界的に有名な「タージ・マハル」に



写真10. イスラム街ベジタリアン食堂



写真11. 中央分離帯で芸をしてお金を取る後ろ向きのクマとサル

行くこととする。ここニューデリーから車で3時間ほどのところのようだ。運転手と交渉して4,200ルピーとする。出発する。イスラム街でベジタリアンの食堂があるようだ（写真10）。3時間の長旅で、途中には大道芸人というか、クマとサルで芸をさせる芸人が出ていた（写真11）。クマは檻に入るではなく、鎖でつながれているだけなので大丈夫かと思う。クマの写真を車の中で撮ったら親方がひどく怒った。金を出せと言うことらしい。そのまま行き過ぎる。

タージ・マハルはさすがに素晴らしい。イスラム教17世紀のムガル帝国の華麗さを表している白の優美な霊廟だ。入場料は外国人720ルピーだった（インド人は20ルピー）。良い休日だった（写真12, 13, 14）。

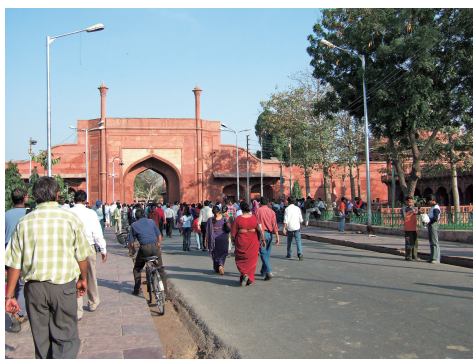


写真12. 大勢の人がタージ・マハルに行く



写真15. ソミック石川インド工場前で

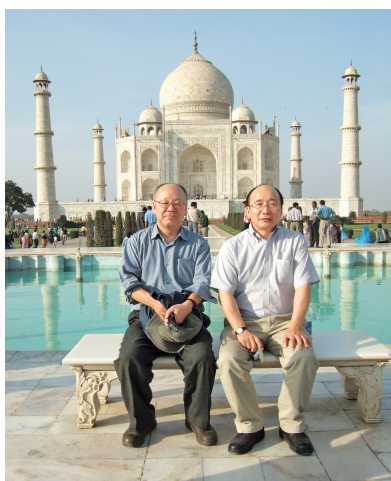


写真13. タージ・マハルに来た



写真16. ソミック石川インド工場 日本人一人で
頑張る北野さんに聴き取り調査



写真14. タージ・マハルをつまむ



写真17. 工場内

イスラムで酒がない

往復6時間の長旅であったので当然夕食にはビールが必要だ。ぼろいホテルだが帰って食事をしよう

としたが、なんとイスラム地区なので酒は置いていないという。参ったということはどうしてもものが渴いたので、外へ出ることとする。2～3軒の店のぞいたが酒を置いていない。ようやく「ビールあ

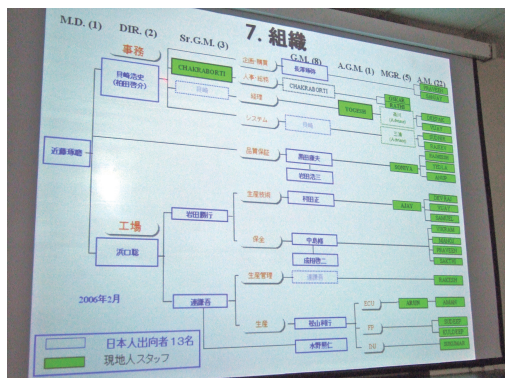


写真18. デンソーインド工場組織図 白が日本人



写真20. プネーのホテル



写真19. 工場レイアウト



写真21. ホテルの朝食

るか」と聞くとあると言うので入る。「置いてないな」と思うと机の下からビールを出してくる。何本も飲んで満足してホテルへ帰って寝る。

工場見学と聴き取り

2月20日朝8時に出発して工場見学をした。タクシーを昨夜頼んでおいたが、夜には1日貸し切りで600ルピーと言っていたのに、朝になると800ルピーだと言う、仕方ないので払うこととする。

ソミック石川工場見学と聴き取りを行う(写真15, 16, 17)。

デンソー工場は日本人出向者が多い

次はデンソーの工場を訪問した。トヨタ系の部品会社とはいえ、一部上場の大企業である。ソミック石川の日本人出向者は一人であったが、デンソーは

13人の出向者がいた。さすがである(写真18, 19)。

2月21日インド西部プネー市へ、飛行機は遅れる遅れる、きれいなホテル

次の日はデリー空港からインド西部のマハラシュトラ州プネーに向かった。朝5時に起きて国内空港に向かった。しかし、出発は8時だが、実際の出発は13:24だった。5時間越えの遅延で、さすがインドと思ってしまった。プネーのホテルは西洋式のきれいなものだった(写真20)。インドは衛生問題があり、日本人は必ず下痢になるからと言われていたが、このホテルなら大丈夫と感じた(写真21)。

ホテル、トイレ内のハンドシャワーはどう使う

ここのホテルのトイレにはハンドシャワーがついていた(写真22)。先のニューデリーのホテルにもついていた。これは何か。トイレ内のことなのかなかなか聞くことができない。日本人はウォッシュレット



写真22. トイレとハンドシャワー

トのようなものだと、お尻を洗うのかと思うだろう。又は単にトイレ掃除のための床を流す水道なのかと思うかもしれない。実は、東南アジアのタイやラオス、インドネシアでもこのシャワー状の水道は大抵のホテルにはついている。中国や東南アジアの田舎へ行くと、トイレにはこの水道はついていなくて、紙もなくただ甕に水が貼ってあり、手桶のようなものが置いてあるのが普通だ。ここから類推すると、このハンドシャワーは日本のウォシュレットのように、水をお尻に当てて洗い流しても良いであろう。しかし、甕と手桶から発展したとすると、水を手に当てて手でお尻を洗うのであろう。この装置がすてにあるので、日本のTOTOなどのウォシュレットはアジアでは普及しないであろう。

工場見学

2月22日〔ブネーの街角（写真23、24）〕、中央発條（株）と（株）ユタカ技研を訪問し工場見学と聴き取り調査を実施した（写真25、26、27）。

ひどい腹下しと散々な帰国、バンコックで危うく乗り遅れる

全ての予定を終えたので酒宴でもと思ったが阿部先生の体調が悪い。腹下しのようなのだ。終に捕まったかというわけで、最後の酒宴はなし。樋口のみホテルのレストランで食事をする。

翌日23日、出発となりタクシーでムンバイ（旧ボンベイ）空港を目指す。ムンバイはインドでは有名な街なので、飛行機の出発が23：50ということもあ



写真23. 街角



写真24. 街角のインド人

り、8時間ほどの余裕があるので、予定では街を見学しようということになっていた。しかし、阿部氏が腹下しとなっていたのに加えて、樋口も調子が悪くなってきた。下痢のようだ。どうも西洋式のきれいなホテルということで、油断して生野菜を食したのがいけなかったようだ。生野菜を洗う水にやられたか。

そのため、二人ともタクシーの中で死んだようになって、3時間を過ごした。ムンバイ空港についてもひどい下痢で、空港の薬局で下痢用の薬を買い服用する。市内見物どころではなくとてもつらい。蹠蹠としてバンコック行きの航空機に乗り込む。24日5：30頃バンコックに着く。トランジットで3時間ほど関西空港行きを待つ。早朝であり、バンコックの空港内で寝たような寝ないような調子で待つ。阿部氏はだいぶ回復してきたが樋口はまだまだ。

時計では後2時間ほど出発までである。死んだようになっていて、何かアナウンスが聞こえる、



写真25. 工場内（中央発條）



写真26. 説明を受ける（ユタカ技研）



写真27. 工場食堂で食事中のインド人

「ミスターひぐーち、みすたーあべ」、
 「Mr. Higuchi, Mr. Abe・・・」
 「Mr. Higuchi, Mr. Abe・・・」

我々を呼んでいるんじゃないのか。ハッと気が付いた。「時差だ」, バンコックと日本では2時間の時差がある。計算に入れず日本時間の時計を見ていた。しまった、遅れてしまう。大慌てで荷物を抱え

走る、下痢もなんのその。つらいつらい。

何とか間に合い、我々を探し待っていたようだ。参った、参った。

関空までは、またまた死んだふりで機内食も食べず寝ている。

関空についた。まあ、少し良くなっているがまだまだ。関空から新大阪駅までの遠いこと、そこから豊橋までの苦痛、これからは絶対関空は使わないと誓う。

3. おわりに

2000年代初期の阿部先生と樋口の海外調査余話は以上のようなものでした。初めに述べたようにこの頃、「中部企業のアジア進出」のテーマの下で、13回ほどアジアの国を調査しました。今回はこのうち初期のタイとインドについてのみの紹介です。

阿部先生はこの3月に愛知大学を退職されます。本稿の海外調査の頃、阿部先生は50歳の初めてで意欲的に企業調査に取り組んでおられました。その一端を皆様に見ていただければと願います。2023年の今年も2回ほど阿部先生と一緒に国内調査を実施しました。これからもお元気で研究に励まれることを期待しています。

参考文献

- 阿部聖・樋口義治・佐藤元彦（2009）『中部企業のアジア進出』, 愛知大学中産研研究報告第65号 愛知大学中部地方産業研究所
- 阿部聖・樋口義治・森久男（2014）『中部企業の中国展開と現地化調査報告書～自動車関連産業を中心に』, 愛知大学中産研研究報告第67号 愛知大学中部地方産業研究所
- 樋口義治・佐藤元彦・阿部聖（2005）『中部企業のアジア展開－インド・ベトナム・中国（広東省）』, 愛知大学中部地方産業研究所

